様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	言語系コース（英語） ／薮下　克彦

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され，教員の研究費配分も厳しくなってきており，教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで，科研費申請に向けて，あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1．目標・計画

現在，中高の英語科教育において，文法教育が「予備校化」していることに私は危惧している。具体的に言うと，文法内容を原理に基づき理解させるのではなく，最初から「公式」の形で提示し暗記させる指導が横行している。例としては，関係代名詞の選び方として，次のような「公式」が広く流布している。「（先行詞が）人だったら who，物だったら which，どっちか迷ったら that」

このような理解に基づかない暗記中心型の英文法教育を是正するべく、中高における英文法教育の実態，背景を調査し、その上で、学校教育における望ましい英文法教育とはどのような物かに関する基礎的研究を行いたいと思っている。

2．点検・評価

本学または非常勤で担当している授業において，時折，受講生に彼らが中学校および高校で受けてきた英文法の指導方法を訊ねた。その結果，上で危惧したような理解に基づかない「公式」暗記中心型の指導方法が広く採用されていることが確認された。ただ，これは非公式な調査結果にすぎない。現在科研申請計画中の研究調査では，中・高校の英語科教員に，英文法指導に関する考え方，現状，課題などを訊ねるアンケートを実施し，その結果に基づき，英語科教育における英文法指導に関する提言を行いたいと思っている。

Ⅰ－2．大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で，あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか，具体的に示してほしい。

1．目標・計画

○　本学の学部卒業生へ連絡を取り、近況を伺いがてら本学大学院への進学を促す。
○　学会、研究会などに参加したおり、他の大学の教員に本学大学院、特に長期履修制度を周知する。

2．点検・評価

○　連絡先がわかる本学の卒業生に近況を聞くために連絡を取ったおりに、本学大学院への進学を勧めた。
○　参加した複数の学会の懇親会で、本学大学院の長期履修制度を話題にし，教員になることに興味のありそうな指導学生に本学大学院の紹介依頼をした。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

勉学はもちろんのこと，生活，進路に関する相談，教採対策など，幅広く学生の教育・生活支援を行っていきたいと思っている。特に、今年度から学部一年生の担任になったので、新一年生が充実した学生生活を送るための基盤作りに関して、学生の目線にたって、アドバイスしていきたいと思っている。

2．点検・評価

教採に関しては、一部の学部4年生と教採を受験する院生に、英文法と英語による面接に関する指導を行った。その結果がどうか定かではないが、多くの合格者がでたことに少しでも貢献できたのではないかと自負している。

英語コース学部一年生の担任として、授業内、授業外で、学生の様子に気をつけるようにしている。具体的には、こちらから積極的に声をかけ、何かあれば、いつでも相談してくれるように言っている。行事としては，5月と3月の2回クラス全体で昼食会に行った。学生一人一人の学修・生活状況の把握に役立ったとともに，クラス全体の一体感を確認することができた。来年後も引き続き，このような活動を行いたいと思っている。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

○ 「否定極性辞」の一つである日本語の「誰も」に関してこれまでに国内外の学会で発表した成果を一つの論考にまとめる。

○ 最近、意味論において、許可を表す文、例えば、英語で言うと"You may/can"で始まる文にまつわる特異な性質が注目されている。これらの性質がどのように生まれるのかに関しての有用な示唆を得るべく、日本語の許可文の一形式である「～してもよい」の分析を試みる。

○ 現在、英語を話す際、日本人の名前を言うとき、いわゆる「下の名前」と「上の名前」のどちらを先に言うのかに関しての決まりはない。どちらが適当であるかを論議する際、よく聞かれるのは「英語の流儀に従うべきである」とか「日本人なのだから日本の文化・習慣に従うべきである」とかの理由を聞くが、どちらの立場にも一理あり結論は出ない。これは、どのような目的のためにはどちらの順番が有用であるかということを明らかにせずに議論しているのでそうなってしまうのは当然である。そこで、私は、目的を設定するとどちらの名前を先に言うべきかという問題に解が与えられる分析枠組みを提案したいと思っている。

2．点検・評価

○「否定極性辞」に関して、特に、日本語の「誰も」に関しての研究は、9月にドイツ・ベルリンにおいて、さらに、10月には東京都立川市，11月にはバリ島で開催された国際学会で発表し、Proceedings of the 26th Pacific Asia Conference on Language, Information, and Computationに "Japanese Pseudo-NPI Dare-mo as an "Unrestricted" Universal Quantifier"として出版された。

○ 英語を話す際の日本人の「上の名前」と「下の名前」の順番に関する問題に関して，情報の正確な伝達という意味では，最初に「下の名前」次に「上の名前」の方が「有利」であるという主旨の論文を執筆中である。

○ 「許可」文の意味・語用論に関しての研究は，残念ながらあまり進んでいない。ただし，関連した研究として，英語の"any"の意味・語用論を進めている。

○ 小中高における英文法の指導の実態と問題点を研究する課題は，I-1で書いたように，次の科研申請をめざし進めている。

Ⅱ－3．大学運営

1．目標・計画

言語系コース（英語）長、学部入試委員、学生支援委員他の業務を中心にして大学運営に貢献したいと思っている。

2．点検・評価

言語系コース（英語）長，学部入試委員（試験班長），学生支援委員（学生用危機管理マニュアル作成WG委員），「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」（教員養成モデルカリキュラム研究開発委員会委員，カリキュラムマップ・ガイドライン研究協議会委員）等の業務をとおして大学運営に貢献することができた。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

○　授業（「教科教育実践」、研究授業）などの機会に、附属学校教員との交流を深め、共同研究の環境づくりに務める。（附属学校）
○　大学と地域・社会また留学生との交流、相互理解を図りたい。（社会連携、国際貢献）

2．点検・評価

附属学校教員との交流に関しては、附属中学校に観察実習の引率、研究授業に参加し感想を述べる程度の交流しか行っていない、共同研究の環境作りに至っては、残念ながら実質的進展はなかった。留学生との交流は、テニス、パーティーなどでふれあうことで、友好をはかると共に、生活・学修上のことで相談に乗った。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）